

一般社団法人日本社会福祉学会
第70回秋季大会報告

第70回秋季大会 実行委員長 津田 耕一(関西福祉科学大学)

2022年10月15日(土)、16日(日)の両日、関西福祉科学大学にて、第70回秋季大会が開催されました。ここ数年、台風、新型コロナウイルス感染に伴い、一部プログラムの中止やオンライン形式による開催の時期を経て4年ぶりに全面対面形式による開催ができたことを心より感謝申し上げます。当日は天候にも恵まれ、多くの方々にご参加いただきましたことを感謝申し上げます。参加登録者数(海外自由発表者を含む)585名、会場への参加者348名、オンラインでの参加者287名の方にご参加いただきました。

一方、この間の社会情勢等を鑑み、対面形式、オンライン形式、オンデマンド配信などを融合した、これまで日本社会福祉学会では経験したことのない開催形式を取り入れての開催となりました。途中マイクの音声が聞こえにくいなどいくつかご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

学会の開催のお話を頂いてから3年越しの開催となりました。当時会長の金子光一先生より連絡を頂いた時には戸惑いもありましたが、社会福祉学科の若手・中堅の教員から「やるなら今ですよ。私たちが元気なうちにぜひ!」という声に後押しされてお引き受けいたしました。新型コロナウイルス感染対策の関係上、開催が1年延長し、今年度の開催となりました。

この間、大会実行委員会委員長の山縣文治先生、岩崎晋也先生、伊藤嘉余子先生はじめ実行委員、学会の理事、国際文献社の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

初日の午前は、「社会福祉研究・教育における多文化共生～コロナ禍における留学生の経験と教育・支援の現場から～」と題して留学生と国際比較のためのワークショップが行われました。開会式の後、学会賞授賞式が挙行されました。岩田正美名誉会員と永田祐会員に学術賞が、史邁会員と阿久津美紀会員に奨励賞(単著部門)が贈られました。おめでとうございます。

本大会のテーマは、「新たな日常と社会福祉—「つながり」の未来を見据えて—」です。幾多の災害や新型コロナウイルス感染拡大を機に、私たちの日常の生活様式が変化し、新たな生活様式の模索が迫られており、改めて生活の日常性ということについて、問い直す時期が到来したとも言えます。そのようななか、人々の生活に大きく関与している社会福祉の果たす役割は重要視され、社会福祉に従事する専門職は不可欠な存在であり、人々の「つながり」をテーマに専門職の果たすべき役割について議論するというのが趣旨です。

大会校企画のシンポジウムでは大会テーマに沿って活発な議論が展開されました。対面ならではの熱気にあふれシンポジストと会場が一体となったシンポジウムとなりました。

2日目は、研究支援委員会による「研究を止(と)めない～様々な危機をどう乗り越えるか～」と題したスタートアップ・シンポジウム、「障害×女性—性と生殖をめぐる～」と題した特定課題セッション、「社会福祉学における研究方法論を考える～評価の具体的な方法～」と題した学会企画セッション、口頭発表が行われました。ポスター発表はweb上で行われました。口頭発表は105報告でした。全体統括、司会の大役を担っていただいた会員の皆様に、改めてお礼申し上げます。

本大会を振り返って、いくつかの課題も見出されました。まず、口頭発表・ポスター発表の査読につ

いてです。かなり厳格にしたことで発表者の皆様には相当なご負担をおかけしました。査読の範囲や基準についての議論が求められています。第2に、従来の対面形式のみの開催から、ライブ配信、オンデマンドといった複雑な開催としました。メリット、デメリットの両側面があらうかと思います。次年度以降の開催形式について議論していく必要があります。第3に、新型コロナウイルス感染防止の観点から、情報交換会を取り止めました。ポスター発表もweb形式としました。このことで、会員同士の交流の場や歓談の機会が制限されていたと推察されます。久しぶりの対面形式ではあったもののやや残念であったと思われます。参加された皆様の忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いに存じます。

最後に、本大会は学会員による学内の実行委員17名と学会員ではない社会福祉学科教員1名による18名の体制で準備に臨みました。また、事前の準備や当日のスタッフとして本学の学生が来場者を心を込めてお迎えいたしました。空閑浩人会長の大会開会の挨拶の冒頭で本学学生の対応に対するお褒めの言葉を頂戴しました。教員スタッフ、学生スタッフ、“みんなで作り上げた”大会だと思っております。学内の関係者にも感謝申し上げます。

名誉会員の推挙に寄せて



岩田 正美 新名誉会員

【本学会役員歴】

第20期 理事（3年）

第21期 理事（3年）

第24期（第3期） 会長（2年）

第25期（第4期） 会長（2年）

役員通算4期（10年）



2022年春の日本社会福祉学会大会において、名誉会員への推挙をいただきました。

もうそのような年齢になったのかという、やや苦い自覚とともに、名誉会員＝「学会のそうそうたる長老」というイメージからいうと、私でいいのですか？という思いも去来します。大会の開催校の下っ端としてお手伝いしていた時は、まさに日本社会福祉学会を作り上げてきた著名な先生方たちが長老であり、お茶を運ぶのにも気を遣った記憶があります。それらの先生方のようになったかと問えば、いやいや、まだまだ、というところでしょうか。

それでも、学会の役員活動では、多少のお手伝いはできたかもしれません。

思い出深い一つは、学会誌『社会福祉学』の問題でした。今でこそ、学会誌の内容は大変水準の高いものになっていますが、それは会員が投稿し、これを査読して、水準を高めたものを掲載していくという仕組みを確立させたからに他なりません。私が機関誌担当の委員になった当時は、特集、学会シンポジウム、自由投稿などの仕分けで、「企画もの」が中心だったと思います。自由投稿についても厳しい査読を通すわけでもなかったため、学会誌というよりは商業誌のような作りだったと記憶しています。社会福祉分野は、書ける場所（依頼）が多いので、学会誌に出さなくても、業績は上げられるというような風潮もあったかもしれません。ところが次第に、研究者の論文も査読つきかどうかで評価が異なってくるようになったこともあって、本格的な学術誌に衣替えし、査読制度も査読者の質を上げて、内実のあるものにしようという機運が高まっていました。ちょうどその頃編集委員を仰せつかったので、委員会では査読についてずいぶん議論しました。査読は平均点の論文を発掘するけれど、天才は落とす可能性もあるとか…。議論が白熱して、研究とは何かという問題に収斂していった、とても面白かったのを覚えています。この経験があるので、査読の仕事は、今でも大体お引き受けしています。査読はやや遅れた感がありましたが、査読制度についてわかりやすく学会誌に掲載したり、のちには研究倫理指針の策定など、むしろ他の学会をリードするような方向にいったことは、嬉しいことでした。

もう一つの思い出は、2014～2016年に第四期の会長を引き受けた時に、学会の事務局を全面的に外部委託にするという仕事をせざるを得なくなったことです。実は2012年に突発性難聴で聴力を失ったこともあり、なるべく代表のような役職にはつかないようにしていたのですが、そこを某会員（女性）に見咎められ、まあ、しょうがない、女も逃げていばかりはダメね、ということで泣く泣く引き

受けました。当時、学会誌や会員管理などは外部委託をしていましたが、学会の自前の事務所が四谷にあり、そこに非常勤の職員をお願いして運営していました。これを全面委託にする方向での検討が始まりました。職員の方達とは長年のつながりもあり、事務所は会議室にも使えましたから、なぜ全面委託かという批判が当然あり、しかし、会員規模、一般社団法人への組織替えなどから考えると、そうせざるを得ない状況がありました。問題は、全面委託できる業者の選定で、このため、プレゼンや書類審査に時間をかけ、理事の間で何度もディスカッションを繰り返しました。もちろん、なんとかやり終えたのは、まったくこの期の理事の方達が一丸となって推進したからで、私はただ心配していただけかもしれません。

ともあれ、そのようなことで、日本社会福祉学会は、私にとって一つの学会という以上の存在であり、今後も質の高い学術団体として存在意義を発揮されることを心より願っています。

2022年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2022年度の学会賞が決定し、学術賞(単著部門)として岩田正美名誉会員ならびに永田祐会員が、奨励賞(単著部門)として史邁会員ならびに阿久津美紀会員が選ばれました。

授賞式は、第70回秋季大会一日目の2022年10月15日(土)に関西福祉科学大学において、開会式に引き続いて行われました。この模様はライブ配信され、後日、11月17日(木)までオンデマンド配信もされました(大会校企画シンポジウム動画の開始約1時間)。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



金子副会長 笹岡委員 黒木委員長 永田会員 阿久津会員 空閑会長 山縣副委員長 保正副会長
※岩田名誉会員、史会員はオンラインで授賞式に登壇されました。

◆ 学術賞(単著部門) 岩田 正美(日本女子大学名誉教授)

受賞作:『生活保護解体論 ——セーフティネットを編みなおす』

(岩波書店、2021年11月5日刊)



8月のはじめに、2022年度の学会学術賞を受けますか?というメールを事務局からいただいたときは、大変驚き、間違いではないかと返信をしてしまいました。なぜなら、私は春の大会で名誉会員への推挙をいただいたような後期高齢者で、なおかつ2017年度に学術賞をすでに頂いていたからです。要するに、もう「上がり」の研究者ですし、若い研究者の邪魔をしてはいけない、2度目では申し訳ない、という気持ちでした。ところが規定上、年齢制限や回数制限はないようなので、審査委員会が推挙してくださったと伺い、ありがたくお受けすることにしました。今回は他にも3人の受

賞者があり、いやーさすがに日本社会福祉学会は「全世代型」なのかな、とやや気持ちが楽になりました。

受賞作品は、かねてより疑問に思っていた生活保護制度の、社会保障・社会福祉制度全体の中での「孤立した位置」を本格的に解き明かしたいと考えたものです。生活保護については、いわゆる水際作戦などの手続問題や、自立支援がクローズアップされるわりに、制度それ自体を吟味する研究が少ないこと、また日本福祉国家の中核にある「国民皆保険・皆年金」制度との関係がほとんど議論されていないことが気になっていました。また生活保護基準と低所得基準との関係も整理されていません。それらの問題を並べた上で、複数の社会扶助へ解体する道を提案したものです。

当初は、特に貧困支援などを行っている若い方達を読めるようにと、一般書の体裁で、優しい表現を心がけたのですが、かなり複雑な制度論なので、私自身が勉強し直す部分が多く、その分難しいものになってしまったかもしれません。ここでの提案は、後に続く方達に補正していただきたいと思っておりますが、どうしても研究は「蛸壺」的になりやすいので、このようないくつかの制度にまたがる議論が浸透しにくいようには感じています。

◆ 学術賞(単著部門) 永田 祐(同志社大学)

受賞作:『包括的な支援体制のガバナンス

——実践と政策をつなぐ市町村福祉行政の展開』

(有斐閣、2021年10月15日刊)



この度は、拙書『包括的な支援体制のガバナンス 実践と政策をつなぐ市町村福祉行政の展開』に対して学会賞(学術賞)の栄誉を賜り、誠にありがとうございました。

本書は、社会の個人化に伴って顕在化した新たな生活困難への対応という課題に対して、「制度福祉間」そして「制度福祉と地域福祉の協働」という二つの協働によって対応していく包括的な支援体制をどのように構築していけばよいか、ガバナンスという視点から検討したものです。包括的な支援体制のガバナンスとは、実践を担う多様な主体との協働を通じて、国の施策を加工し、カスタマイズしていく領域であり、その多様な協働のプロセスのかじ取りを担う市町村福祉行政に求められる役割を明らかにしてきました。すなわち、マクロの政策とミクロの実践をつなぐメゾ領域を、法律による社会福祉の「運営」としてではなく、多様な主体のダイナミックな協働の舞台として捉え、それを推進していくプロセスを「ガバナンス」という視点から分析していくことを提起したものです。

このようなプロセスを明らかにしていくために、本書では包括的な支援体制の構築を担う担当課とその職員に対するインタビュー及び参与観察によって事例研究を行いました。調査対象は、筆者が一

定期間関与してきた自治体を選択しましたが、このことは、様々な形で自分自身が「実践」のアクターとなりながら、同時に研究者としての視点で現場に関与していくという、地域福祉研究の難しさを考えることにもなりました。地域福祉研究の方法については、今後も模索していきたいと考えています。

社会福祉は実践の学ですから、これからも現場で地道に努力している皆さんの実践に謙虚に学びながら、「講評」でご指摘いただいた課題を受けとめ、本書で述べた「未完のプロジェクト」を前に進めていく研究と実践に取り組んでいきたいと考えています。最後になりましたが、本書を精読くださった審査委員の先生方、本研究をとともに作ってくださった5つの自治体の関係者の皆様、そして、これまで私の研究を導いてくださった多くの先生方にこの場を借りて感謝を申し上げます。

◆ 奨励賞(単著部門) 史 邁(清華大学)

受賞作:『協働モデル

——制度的支援の「狭間」を埋める新たな支援戦略』
(晃洋書房、2021年3月20日刊)



大学院の時、指導教官であった埋橋孝文先生から、「良い研究」よりも「面白い研究」だと評価される方が嬉しく思いました。最初は「面白い」の意味が分からなかったのですが、同志社での七年間の留学生活の中で、だんだん分かるようになった気がします。「面白い研究」を目指した拙著は、この度、日本社会福祉学会の奨励賞をいただけて、光栄である一方、自分が思う「面白さ」が読者たち(とりわけベテランの先生たち)からの共感を得、認められて本当によかったと思います。ここで、自分が思う研究の「面白さ」を2点だけ自慢したいです。

一つは、多様な知との出会いです。拙著は、同志社大学社会福祉学科の博士学位請求論文として執筆したのですが、その内容は社会福祉学の話のみに限りません。研究目的を達成するために、多様な学問分野の知見・方法に幅広く、積極的に触れました。例えば、前半の理論部分では、伝統的な福祉多元主義理論(社会福祉学)以外に、新制度派組織論(組織社会学)、官民協働論(行政学)などの分野の論点も批判的に考察しています。後半の事例検討の部分では、若者支援の福祉支援事例に焦点化したものの、サービス・マネジメント論(経営学)で慣用された分析手法を大胆に応用しています。

もう一つは、新たな知の作り出しです。「協働」という言葉がこれまでの研究書や公文書において、当たり前のように曖昧に濫用されている現在、拙著では随波逐流せず、その根本を問い直しました。特に、世界的に注目されている「コ・プロダクション」(co-production)という概念視座を福祉領域の「狭間」問題に応用するのは、拙著の「売り」だといえます。この中で最も美妙的なのは、やはり詳細な検討を踏まえて実際の社会サービス生産活動の実践場面から、新たな理論を自ら体系化していく過

程でした。行き詰まった時もありましたが、この体験こそが、本研究が従来のどの研究とも異なる、学問的なオリジナリティだと言えましょう。

おそらく、面白い知を色々吸収することが、自身の研究の面白さにもつながったのでしょう。これからも「面白い」研究を目指し、引き続き頑張りたいと思います。

◆ 奨励賞(単著部門) 阿久津 美紀(目白大学)

受賞作:『私の記録、家族の記憶

——ケアリーヴァーと社会的養護のこれから』

(大空社出版、2021年8月13日刊)



この度は奨励賞に選んでいただき、身に余る光栄で、身の引き締まる思いです。これまで研究でお世話になった方、また沢山の著作物の中から拙著を選んでいただきまして、審査委員会の先生方には感謝と御礼を申し上げます。この本は、大変拙い文章で恐縮ですが、児童福祉に関する記録の問題について焦点を当て、この課題に多くの方が関心を寄せてほしいと思い、刊行に至りました。

私はアーカイブズ学という記録管理や情報管理を研究する学問分野に軸をおき、アーカイブズ学の研究を開始した当初から社会的養護を研究フィールドとして設定してきました。この本は大学院の博士課程から現在に至るまでの研究成果となります。研究の過程で多くの児童福祉施設に訪問させていただき、調査をさせていただきました。一番長期にわたって調査で訪問させていただいている施設は、大学院の修士課程の時からお世話になっています。当時、調査のために施設に訪問し、お会いした職員の方から「研究者は一回来て、その時見たことだけで決めつけて、成果にするから嫌いだ」と言われ、長期的に足繫く通い、関係を築いていかなければいけないと腹を括った帰り道のことを十数年経った今でも思い出します。職員の方の仰るように、長期に関わってきたことで、見えてきたことも多くあり、あの時に率直な言葉をいただいて良かったと心から感謝したいです。

2016年から2018年にかけて、児童自立支援施設北海道家庭学校の中に住み、職員や入所児童の話や様子から学ぶ機会に恵まれました。その成果は、今回受賞させていただいた拙著には含まれていませんが、長い歴史をもち、民間の児童自立支援施設として運営されてきた貴施設の中で過ごし、学んだことは、拙著の構成を考える上で基礎となる部分を構築しています。

今後も今回の審査を通していただきましたご指摘を真摯に受け止め、一つ一つ積み重ねを大切に、研究に邁進していきたいと考えております。



地域ブロック情報



日本社会福祉学会には7つの地域ブロックがあり、それぞれに特徴的な活動が展開されています。今号では、中部地域ブロックおよび関西地域ブロックの活動についてご紹介いたします。

中部地域ブロックから

中部地域ブロック担当理事
谷口 由希子(名古屋市立大学)

中部地域ブロックの主な活動は、①研究例会の開催、②機関誌『中部社会福祉学研究』の発行、③大学院生・若手研究者のための勉強会の開催の3つです。

研究例会は、毎年1回、春の研究例会として開催しています。ブロック内会員による自由研究発表のほか、大学院生・若手研究者のための勉強会や、その時どきのトピックスをテーマにしたシンポジウムを開催しています。2022年度は、4月16日にzoomを用いたオンライン方式によって開催いたしました。

2022年度の春の例会では、自由研究発表が10エントリーあり、3会場に分かれて報告および質疑応答が行われました。大学院生・若手研究者のための勉強会では、「査読の壁を乗り越える!~学術誌への論文投稿~」をテーマとして開催し、コメンテーターを川島ゆり子さん(日本福祉大学)が務めました。シンポジウムは、「コロナ禍での孤立・孤独・生きづらさと社会福祉実践」をテーマに行いました。近藤直子さん(日本福祉大学名誉教授)に「『公のおせっかい』によるつながりの創出」と題した基調講演を行っていただいた後、パネルディスカッションを行いました。パネリストには、鈴木美登里さん(NPO法人「オレンジの会」理事)から「コロナ禍でのひきこもりと8050問題」、冨田正美さん(元母子生活支援施設長、ハーレーサンタCLUB NAGOYA代表)から「コロナ禍での女性の孤立—DV支援の現場から—」、前山憲一さん(半田市社会福祉協議会事務局次長)から「コロナ禍での地域福祉活動—地域のつながりと希望を紡ぐ—」と題してそれぞれのご実践を報告いただきました。コーディネーターを宇都宮みのりさん(愛知県立大学教授)が務め、活発な議論の中で終えることができました。

中部地域ブロックでは、研究例会のシンポジウムを一般公開しています。社会福祉学に関心のある人や支援に携わっている実践者をはじめ、幅広く社会福祉学の魅力を知っていただけるよう中部地域ブロック幹事で力を合わせています。

なお、機関誌『中部社会福祉学研究』は、3月末に第13号を刊行しました。学会ウェブサイトの中
部地域ブロックのページからダウンロードできますので、ぜひご覧ください。

関西地域ブロックから

関西地域ブロック担当理事
所 めぐみ(関西大学)

関西地域ブロックは、年次大会・総会(例年2月か3月)の開催、若手研究者・院生情報交換会の
開催(年に3回程度)、機関誌『関西社会福祉研究』(年1回)の発行を主な研究活動として活動し
ています。年に数回開催する理事会と理事会MLにより適宜検討や情報交換をし、会員のみなさまの
ご協力によりこうした活動等について計画的に進めています。

○2022年度年次大会・総会

日程:2023年2月26日(日)

場所:同志社大学今出川キャンパス(良心館を予定)

現在のところ、対面での開催を予定しております。

午前中には自由研究発表を行います。

詳細につきましては、確定次第、日本社会福祉学会のホームページとメーリングリストでお知らせい
たします。

○若手研究者院生情報交換会

昨年度、第50回の開催を記念して、本学会の年次大会として拡大的に開催しました。50回の内容
はこちらをご覧ください。

https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/kansai_2021_young.pdf

各回の企画は、理事会メンバーを含む会員が担っています。このうち年に1回は、若手研究者・院生
会員が企画を担当しています。以前は関西ブロック内の大学院に持ち回りのこの1回の企画を担っ
ていただいていたのですが、最近、留学生・国際枠として、(元)留学生の若手研究者の方々による企
画を年に1回実施することが定着しています。若手からベテランまで多様な会員の方々のご協力によ
り活動が進められています。今年度も3回の開催を予定、準備を進めています。

第51回は、2022年11月26日(土)13時30分~16時00分から大阪公立大学杉本キャンパス
(杉本図書館10階研究者交流室)で開催予定です。「これからの社会福祉研究を考えよう!」という
テーマで、これまでの研究動向をふりかえり、参加者のみなさんとワークショップ形式で、これからの
社会福祉研究のトレンドについて考えます。今回、久しぶりの対面実施となります。感染対策に十分に
配慮したうえで行いますので、ふるってのご参加、お待ちしております。参加申し込み詳細は、学会ホ
ームページ、会員向けMLでお知らせいたします。

○機関誌『関西社会福祉研究』

これまで8号まで発刊しています。毎年1回年度末の3月に刊行しています。紙媒体の冊子で、関西社会福祉学会・関西地域ブロック会員と、関西地域の福祉系学部・学科等をもつ大学に送付してきました。今後は日本社会福祉学会ホームページに電子媒体(PDF)も掲載する予定です。これにより、より多くの方に会員の研究成果をご覧いただくことが可能となります。

なお投稿論文の締め切りは、毎年8月の末日です。関西地域ブロック会員のみなさまのご投稿をお待ちしております。

よりよい活動に会員のみなさまとともにつなげていけるよう、今後も引き続き会員のみなさまのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

「オルワレを忘れない (Remember Oluwale)」

堅田 香緒里

法政大学

1969年4月、イングランド北部・ヨークシャー地方にあるリーズという都市で、ある一人のナイジェリア系イギリス人男性が亡くなった。溺死だった。二人の警察官から追われ、なんとか逃げ込んだエール川が彼の最後の場所となった。

デイヴィッド・オルワレは1930年、ナイジェリア最大の都市ラゴスで生まれ、19歳になる1949年の夏、貧しい故郷を離れイギリス行きを決行する。イギリスの植民地であったナイジェリアからは、当時多くの若者がオルワレと同様より良い未来を求めイギリスに渡っていた。オルワレは、貧しくて切符を買うこともできず、港町に届けられる落花生の箱の中に隠れてイギリス行きの貨物船に乗り込んだ。密航だ。しかし、船がイースト・ヨークシャーに到着するや否や密航者として刑務所に入れられてしまう。出所後のオルワレは、リーズという工業都市で、戦後のイギリス福祉国家の基盤を支える労働者の一人として生きることになる。

1953年、オルワレは警察との争いに巻き込まれ、暴行罪で起訴され刑務所に戻されてしまうことになる。しかしこのとき警察官に頭を殴られた後遺症で、その後長い間幻覚に悩まされることになる。のちに彼は統合失調症と診断され、リーズ郊外の保護施設に送られ、その後8年間をそこで過ごすことになる。施設では電気ショック療法と重い抗精神病薬を投与され、退院後は仕事もできず、亡くなるまでの最後の2年間、リーズの中心部で野宿をしながら生活していた。その間彼はずっと、二人の警察官から日常的に身体的、精神的虐待を受けていたとされる。

オルワレの死から50年以上が経過した2022年春、彼が最後に目撃された場所に近いリーズ橋に設置されたオルワレのブルー・プラークの除幕式が行われた。ブルー・プラークとはイギリス国内各地に設置されている青色の史跡案内板のことで、歴史的な出来事や著名な人物に所縁のある場所に設置されることが一般的である。その意味で、オルワレのブルー・プラーク設置は、彼の死、そして彼がここに生きていたことを忘れない、歴史に刻むという画期的な意味を持つものであったと言える。ちょうどサバティカルでリーズに滞在していた筆者は、この歴史的な除幕式に参加することができた。除幕式では、彼のブルー・プラーク設置に向けて势力的に活動してきたリメンバー・オルワレやリーズ・シビック・トラストのメンバー、オルワレに関するエッセイを執筆した作家のカリル・フィリップスによるスピーチの他、歌のパフォーマンスも披露された。その場で共有されたチャントの一つをここでシェアしたい。

「エール川は冷たく深い。オルワレ。リーズ警察を信用するな。オルワレ。」

(The River Aire is chilly and deep, Ol-u-wale; Never trust the Leeds police, Ol-u-wale)"

明るい未来を夢見てイギリスに渡ったオルワレは、そこで精神疾患を患い、仕事も住まいも失い、日常的な人種差別を生き、ほとんど常に警察の暴力に晒されていた。そして、39歳の若さで殺された。彼の死は、黒人死亡事件への関与でイギリス警察が初めて起訴されるきっかけとなった¹。その裁判の過程で明らかになったのは、オルワレへの日常的な虐待に関与していた二人の警察官の動機は、「単に彼にこの街にいてほしくなかったから」であったということだ。この言葉が思い出させるのは、2020年11月、渋谷区のバス停で寝泊まりしていたところ、地域住民の男性に殴り殺された野宿女性のことである。彼の犯行動機は、彼女に街から「いなくなってもらおうこと」だった。こうした言葉が象徴しているのは、「異物」を取り除こうとする社会の欲望である。

イギリス福祉国家の基盤を支えた労働者の一人・デイヴィッド・オルワレの死は、人種や貧困、精神疾患等をめぐる様々な差別が交差する地点で、警察権力によってもたらされた。リーズでは、ブルー・プラークの設置を通して、これらの差別や「異物」を取り除こうとする社会の欲望と徹底的に闘い続ける意志を市民たちがはっきりと示すことになった。しかし実は残念なことに、ブルー・プラーク設置の除幕式から数時間後、当該のプラークが何者かによって取り外され／盗まれてしまうという事件が起きた。この出来事は、オルワレが生きた時代から50年たっても変わらぬ差別に根差したヘイトクライムの存在を象徴している。それでも、リーズの市民は諦めない。即座に、市民らの手によってブルー・プラーク型の青いステッカーが作られ、市内の各所に貼られることになった。

約50年前に起きた（そして現在にも続く）ヘイトクライム、そうした歴史を直視するリーズ市民たちの行動は、日本で福祉を学び研究する私たちにどのようなことを問いかけているだろうか。共に考えたい。

参考

デイヴィッド・オルワレと彼の死に関して関心のある方は、以下のウェブサイト「Remember Oluwale」を参照されたい。

<https://www.rememberoluwale.org/>（最終閲覧日：2022年10月28日）



除幕式の様子



市民が作成したブルー・プラークのステッカー

¹ 2名の警察官は過失致死罪で無罪となったものの、陪審員によって一連の暴行の罪で収監されることになった。

CS-NET「サロン企画」も始動します！

研究支援委員会 委員 保田 真希(北翔大学短期大学部)



研究支援委員会では、初期キャリア研究者の情報交換および相互交流の促進を目的として、初期キャリア研究者のネットワーク(Creative Support Network:略称CS-NET)を立ち上げました。2022年3月にはCS-NETの立ち上げイベントを開催し、CS-NETの周知および、初期キャリア研究者の苦悩の共有や研究を進める上での刺激や励みに繋がりました。

立ち上げイベントを実施してから、約7か月が経過しました。この間、CS-NETでは2つの企画を実施すべく、準備を進めてきました。1つは、先日開催された、第70回秋季大会スタートアップシンポジウム「研究を止(と)めない～様々な危機をどう乗り越えるか～」です。この企画は、研究者が様々な危機に直面しながらも、いかに研究を止めず遂行していくのか、苦悩や工夫、課題などを共有することにより、初期キャリア研究者の研究遂行に対するモチベーションの向上を図ることを目的として実施されました。

もう1つが「サロン企画」の始動に向けた準備です。「サロン企画」とは、初期キャリア研究者の交流の場、いわゆる、気軽に会話を楽しむ「サロン」です。「サロン企画」では、地域や研究領域などに関わらず、気軽に交流を図ることで、つながり・居場所の創出や情報の獲得、キャリア形成の参考や不安の解消に寄与できれば、とさまざまな企画を立案しています。例えば、研究助成や論文執筆、キャリア形成やライフコースなどに関する座談会、研究倫理に関する事柄などの多様なテーマを設けた交流や、特定のテーマを設けないフリーの交流、研究会や読書会などを企画しています。将来的には、「〇〇先生の話聞いてみたい!」「研究会を開催したい」など、初期キャリア研究者自身が企画を立案し、研究会やサロンを開催できるように、CS-NETを研究支援の場として活用していきます。そして、徐々に仲間を増やしていき、CS-NETのメンバーも次世代へとバトンを繋げ、初期キャリア研究者の教育・研究活動の活性化に貢献していきたいと考えています。

そして、いよいよ、2022年11月26日(土)に第1回サロン「研究助成～獲得の苦悩と工夫～」を開催します。この機会に、初期キャリア研究者が感じる普段の研究活動の悩みや経験、研究助成を獲得するまでの苦悩や体験談等を自由に話してみませんか？

初期キャリア研究者にとっては、遠方開催のイベントに参加することは費用の負担が大きく、ハードルが高くなりがちですが、オンライン開催により、北海道から九州・沖縄まで全国各地の研究者が気軽に参加でき、交流の場として活用いただけます。今後も、オンライン開催を継続しつつ、会って話せる対面での開催も同時に行いながら、徐々に全国各地の初期キャリア研究者の活動の場になれば幸いです。また、現在、ホームページやメーリングリストの運用開始に向けても準備が進んでおります。

初期キャリア研究者の皆様に加え、多くの会員の皆様のご経験やお知恵をお借りしながら、日本社会福祉学会全体で、研究や教育活動の活性化に繋がっていければ幸いです。今後とも、なにとぞ、よろしく願います。

日本社会福祉系学会連合からの報告

日本社会福祉系学会連合
会長 保正 友子(日本福祉大学)

1. 日本社会福祉系学会連合の概要

日本社会福祉系学会連合は2006年に設立され、今年で17年目を迎えました。現在は、22の社会福祉系学会で組織されています。

これまで、①日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会への協力、②日本の社会福祉系学会の交流と連携を通じた活性化、③研究条件向上のための社会的活動をおもな柱として、活動を続けてきました。

詳しくは日本社会福祉系学会連合のホームページをご覧ください。

<http://jaswas.wdc-jp.com/index.html>

2. 日本社会福祉系学会連合の具体的活動

以下、具体的な活動を4点ご紹介します。

第一は、加盟学会の全国大会・機関誌情報をお知らせしていることです。学会連合のホームページには加盟学会大会情報のページがあります。そこでは、加盟学会の全国大会、学会誌の発行状況、締め切りを掲載しています。また、過去の大会一覧もありますので、大会情報の把握の際にご活用ください。

第二は、2012年より災害福祉アーカイブを開設していることです。災害福祉に関する図書、報告書、論文、関連アーカイブ、支援活動、学会・研究所・大学等、その他の項目にそって収集しています。関連する情報がある場合には、学会連合事務局(union-jssw@kokuzaibunken.jp) (@を半角にして下さい)までお寄せいただくと幸いです。

第三は、加盟学会への補助金制度を設けていることです。この補助金制度は、加盟学会の活動に寄与するために、各加盟学会が開催するシンポジウム、講演会、研究会等にあたって、講師の旅費交通費または開催に際して発生する経費の一部を補助する制度です(2021年5月改正)。毎年、5学会まで、1学会につき5万円を限度としています。

第四は、日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会のサポートを行っていることです。学会連合は、毎年開催される日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会が行うシンポジウムに共催で関わり、共に社会福祉学の水準向上に向けた活動を行っています。

それ以外にも、学会連合独自に研究会を開催したり、定期的な学会連合ニュースの発行を行っています。

2022年度は、加盟学会会員を対象とした研究条件向上を目指す調査実施に向けた準備や、日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会主催のシンポジウム(2023年3月26日予定)への協力を行う予定です。また詳細が決まり次第、加盟学会の皆様にお知らせします。

3. 今こそ加盟学会の英知結集を

現在、私たちのまわりには新型コロナウイルス感染症やロシアによるウクライナへの武力侵攻をはじめ、貧困と格差、虐待、孤立・孤独、ヤングケアラーに代表されるケアをめぐる諸問題等、早急に取り組まなければならない課題が山積しています。

そのどれもが社会福祉に関連する課題であり、社会福祉に対する社会的期待はますます高まっています。今、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義で提唱されている社会正義の実現や人権尊重に向けて、躊躇している余地はありません。多様な主体がそれぞれの立場から、できることを行っていく必要があります。日本社会福祉系学会連合も例外ではなく、社会福祉学やそれに関連する学問を学び追究する立場からのアプローチが求められています。今後はさらに、加盟学会との連携のもとで、英知を結集して社会への発信力を強めていきたいと考えています。

日本社会福祉学会の皆様には、学会連合の存在を知っていただくとともに、活動へも積極的に参加していただければと願っています。

2022年度第1回理事会報告

開催日時:2022年5月28日(土) 18:00 ~ 20:00

開催場所:一般社団法人日本社会福祉学会事務局(Zoomによるオンライン開催)

I. 会長挨拶

定刻となり、木原活信会長より挨拶があった。

II. 理事会開会宣言(欠席理事の確認)

出席者全員がオンライン参加によるWEB会議の開催に際して、音声に問題なく、出席者が一堂に会するのと同等の意思表示が互いにできる状態にあり、議事進行に支障がないことを確認した。

定款第42条に基づいて木原会長が議長となり、出席理事および欠席理事を確認した。定款第43条に規定されている要件を充足したため、「2022年度第1回理事会」を開催するとの宣言があった。

なお、定款第47条に則り、議事録署名人として木原会長、秋元監事、市川監事を選出した。

III. 審議事項

第1号議案 入会審査

総務担当木下理事より資料に基づき説明があった。審議の結果、78名全員の入会が満場一致で承認された。

第2号議案 長期会員審査

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があった。審議の結果、申請者24名全員を長期会員とすることが満場一致で承認された。

第3号議案 2022年度予算案の変更について

財務担当室田理事より、2021年度第5回理事会で承認された2022年度予算案からの変更点について、配付資料に基づき説明があった。審議の結果、2022年度予算案の変更が満場一致で承認された。

第4号議案 2021年度事業報告、決算報告および監査報告(理事会ML審議済)

総務担当木下理事より、2022年度の各事業が滞りなく遂行された旨の報告があり、財務担当室田理事より法人全体および各事業における2022年度決算について詳細な報告があった。また、秋元監事ならびに市川監事より5月12日に実施された監査について報告があった。

審議の結果、2022年度事業報告、決算報告および監査報告を5月29日開催の2022年度定時社員総会に上程することが満場一致で承認された。

第5号議案 全国大会運営委員の追加委嘱について

研究担当岩崎理事より、全国大会運営委員会の第3号委員(当該年度全国大会開催校を代表する者)の追加委嘱が提議され、審議の結果、満場一致で承認された。

第6号議案 『社会福祉学』J-Stage閲覧のための認証パスワードの設定について

機関誌編集担当柴田理事より配付資料に基づき説明があり、審議の結果、今年度から再度認証を設定することが満場一致で承認された。

第7号議案 地域部会委員の理事会承認および「(一社)日本社会福祉学会地域ブロック担当者委員会及び地域部会委員会規程」の改正について

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があり、審議した結果、今後の方針が満場一致で承認された。

第8号議案 第8期委員会構成について(2022年度第2回理事会議題の確認)

総務担当木下理事より、第8期委員会の委員構成予定について配付資料に基づき説明があった。

第9号議案 その他

・マイページの追加機能について

会員ページ(マイページ)への追加機能について次期体制に申し送りをするようになった。

・関西地域ブロック原稿執筆謝礼(非会員)について

「一般社団法人日本社会福祉学会謝金支払い内規」に準じた対応で良いことから、詳細は関西地域ブロックの理事会で検討することとなった。

IV. 報告事項

1. 2022年度会員動向および2021年度退会者報告

総務担当木下理事より、2021年度年会費の納入結果について配付資料に基づき報告があった。また、2024年度に退会した会員の名簿および2015年度以降の会員数の推移を確認した。

2. 2022年度定時社員総会準備状況および当日の進行について

総務担当木下理事より、総会当日の進行について配付資料に基づき説明があった。

3. 全国大会運営委員会からの報告

研究担当岩崎理事より、各行事の準備状況等について配付資料に基づき報告があり、その後、行事ごとにそれぞれの担当理事から詳細な説明があった。

4. 機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集担当柴田理事より、機関誌『社会福祉学』の論文投稿受付・審査および編集状況について、配付資料に基づき報告があった。

5. 国際学術交流促進委員会からの報告

国際学術交流促進委員会担当の和気副会長より、第70回秋季大会で実施する留学生と国際比較研究のためのワークショップについて説明があった。韓国および中国からの自由研究発表者の募集については、中韓両国に案内中である。また、本会から韓国および中国の大会へ派遣する自由研究発表者の募集を行うため、中韓両国に詳細な情報の提供を求めているとの報告があった。

6. 学会賞審査委員会からの報告

学会賞審査委員会担当岩井理事より、二次審査対象の書籍6点、論文2本が選出されたとの報告があった。次回学会賞審査委員会にて授賞候補作が選定され、理事会にて候補作の審議、承認予定であることを確認した。

7. 研究倫理委員会からの報告

研究倫理委員会担当倉田理事が欠席のため、総務担当木下理事より、前回理事会にて審議した二重投稿に関する研究倫理案件について報告があった。

8. 広報委員会からの報告

広報委員会担当伊藤理事より、随時、学会ホームページの更新および多言語翻訳を行い、定期的にTwitterを更新する等の広報活動を行っているとの報告があった。

9. アーカイブ化推進委員会からの報告

アーカイブ化推進委員会担当空閑理事より、学会創設期の機関誌の電子化および事務局保管の古い写真の目録化等を行ったとの報告があった。

10. 研究支援委員会からの報告

研究支援委員会担当保正理事より、第70回秋季大会で実施予定の「スタートアップ・シンポジウム」の準備状況およびCS-NETの進捗状況について、配付資料に基づき報告があった。また、日本社会福祉系学会連合と共同で実施するニーズ調査の準備をしているとの説明があった。

11. 地域ブロックからの報告

- ・北海道地域ブロック:機関誌『北海道社会福祉研究』第42号を3月末に電子ジャーナルとして刊行した。6月4日に北海道社会福祉学会の総会・講演・シンポジウムを開催予定である。「ヤングケアラーのいま」をテーマとし、多数の参加申し込みが届いている。
- ・東北地域ブロック:3月30日に幹事会を開催した。今年度の研究大会は青森県立保健大学での開催を予定している。機関誌の発行について、二重投稿防止のため、論文投稿への受理通知にて確認および注意喚起をすることとなった。

- ・関東地域ブロック:3月13日に研究大会を開催し、午前中は自由研究報告、午後にシンポジウムおよび総会を行った。また、二重投稿防止のため、チェックリストおよび投稿規程等の見直しを行っている。
- ・中部地域ブロック:4月16日の2022年度春の研究例会にて、院生・若手研究者のための勉強会、自由研究発表、シンポジウムおよび総会を開催した。6月に機関誌『中部社会福祉学研究』第13号を刊行予定である。
- ・関西地域ブロック:3月13日に若手研究者・院生情報交換会第50回を記念したテーマとして年次大会および総会を開催した。また、3月31日に機関誌『関西社会福祉研究』第8号を発刊した。現在、次号9号の発刊に向けて準備中である。
- ・中国四国地域ブロック:6月に新体制による部会委員会を開催予定である。
- ・九州地域ブロック:3月末に機関誌『九州社会福祉学』第18号を発刊した。6月に定期総会を书面開催し、7月10日に長崎国際大学にて研究大会をオンライン開催予定である。

12. その他(後援依頼、関連団体からの報告、他)

・後援(協賛)依頼について

総務担当木下理事より、過年度の実績により2件の後援依頼に承諾したとの報告があった。

・関連団体からの報告

1) 日本社会福祉系学会連合

湯澤副会長より、5月29日に総会をオンラインにて開催予定であるとの報告があった。

2) ソーシャルケアサービス研究協議会

和気副会長より全体会議の報告があった。

3) 社会政策関連学会協議会

木下理事より、7月に会議を開催し、役員の改選が行われるとの報告があった。

4) 社会学系コンソーシアム

木下理事より、2023年1月28日(土)にシンポジウムの開催を予定しているとの報告があった。

5) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会:GEAHSS(ギース)

保正理事より、GEAHSS運営委員会の報告があった。

6) 人文社会系学協会連合連絡会

報告事項は特になし。

議長は、議事終了を告げ、20時00分に理事会を解散した。

以上

2022年度第2回理事会報告

開催日時:2022年5月29日(日)12:00～12:20

開催場所:一般社団法人日本社会福祉学会事務局(ZoomによるWEB開催)

I. 出席者確認

出席者の確認をし、定款第43条に規定されている要件を充足したので、理事会を開催するとの宣言があった。まず、出席者全員がオンライン参加によるWEB会議の開催に際して、音声に問題なく、出席者が一堂に会するのと同等の意思表示が互いにできる状態にあり、議事進行に支障がないことを確認した。

II. 審議事項

第1号議案 会長・副会長の選出

定款第18条2項により、会長候補である空閑浩人理事を会長に選定する案が発議され、全員異議なく決議された。さらに、副会長候補である金子光一理事および保正友子理事を副会長に選定する案が発議され、全員異議なく決議された。

第2号議案 理事の役割分担について

空閑会長より、配付資料に基づき説明があった。各理事の担当業務および担当委員会を確認し、満場一致で承認された。

第3号議案 日本ソーシャルワーク教育学校連盟理事への推薦について

空閑会長より、本会からの日本ソーシャルワーク教育学校連盟の理事として保正友子副会長が推薦され、審議の結果、満場一致で承認された。

第4号議案 委員会の委員について

空閑会長より、一般社団法人日本社会福祉学会第8期委員会構成について配付資料に基づき説明があり、審議した結果、満場一致で承認された。

第5号議案 その他

特になし。

III. 報告事項

I. 第8期役員就任承諾書の提出について

学会事務局担当者より、登記変更手続きに必要な就任承諾書等の提出について、配付資料に基づき説明があった。

2. 2022年度年間予定

空閑会長より配付資料に基づき2022年度のスケジュールについて説明があった。今年度の理事会および運営委員会もオンライン開催を主とするが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況が落ち着いていることから、全国大会前日に開催予定の理事会のみ対面での開催を予定していることを確認した。

3. その他

特になし。

定款第47条に則り、空閑浩人会長、大島巖監事、岡部卓監事を議事録署名人として選出した。

議長は、議事終了を告げ、12時00分に理事会を解散した。

以上

2022年度第3回理事会報告

開催日時:2022年7月30日(土) 10:00 ~ 12:00

開催場所:一般社団法人日本社会福祉学会事務局 (Zoomによるオンライン開催)

I. 会長挨拶

定刻となり、空閑浩人会長からの挨拶に続いて、出席者全員が自己紹介を行った。

II. 理事会開会宣言(欠席理事の確認)

出席者全員がオンライン参加によるWEB会議の開催に際して、音声に問題なく、出席者が一堂に会するのと同等の意思表示が互いにできる状態にあり、議事進行に支障がないことを確認した。

定款第42条に基づいて空閑会長が議長となり、出席理事および欠席理事を確認した。定款第43条に規定されている要件を充足したため、「2022年度第3回理事会」を開催するとの宣言があった。なお、定款第47条に則り、議事録署名人として空閑会長、大島監事、岡部監事を選出した。

III. 審議事項

第1号議案 入会審査

総務担当木下理事より資料に基づき説明があった。審議の結果、32名全員の入会が満場一致で承認された。

第2号議案 2023年度業務委託契約について

総務担当木下理事より、(株)国際文献社と次年度契約を継続する案が提議され、審議した結果、9月30日までに次年度の具体的な契約書案を確認することを前提として、満場一致で承認された。

第3号議案 新体制の挨拶状送付リストについて

総務担当木下理事より、第8期役員体制が発足した挨拶状案および送付先リストについて、配付資料に基づき説明があり、審議の結果、満場一致で承認された。

第4号議案 Zoomの契約更新について

総務担当木下理事より、Zoomについて、今年度の契約内容のまま次年度も契約を更新する案が提議され、審議の結果、事前に各地域ブロックの意向を確認したうえで、契約を更新することになった。

第5号議案 編集委員の追加委嘱について

機関誌編集担当理事より、前回の理事会にて委員委嘱の承認を得られていなかった特別研究期間中の委員について追加委嘱の要請があり、審議の結果、満場一致で承認された。

第6号議案 2022年度学会賞授賞候補作について

学会賞審査委員会担当杉山理事より、2022年度学会賞の審査経過および授賞候補作について配付資料に基づき説明があり、審議の結果、今年度の学会賞授賞が満場一致で承認された。

第7号議案 英語の翻訳者について

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があり、次に広報委員会担当岩永理事より補足説明があった。審議の結果、運営委員会からの提案が満場一致で承認された。

第8号議案 CS-NETメーリングリストの利用規約について

研究支援委員会担当高良理事より、現在、立ち上げ準備中である「CS-NET」のメーリングリスト運用・利用規約案について配付資料に基づき説明があり、審議した結果、満場一致で承認された。

第9号議案 スタートアップ・シンポジウムのシンポジストへの交通費補助について

研究支援委員会担当高良理事より、初期キャリアにある登壇者に対し、本会から交通費を一部補助することについて、検討依頼があった。審議の結果、第70回秋季大会にて実施されるスタートアップ・シンポジウムに限り要望を認めるとともに、今後、旅費規程を見直す必要があることを確認した。

第10号議案 日本社会福祉系学会連合と共同実施の初期キャリア研究者の実態調査に関して

研究支援委員会担当高良理事および日本社会福祉系学会連合の会長である保正副会長より配付資料に基づき説明があり、審議の結果、満場一致で承認された。

第11号議案 マイページ改修および年会費支払方法の拡充について

総務担当木下理事より、クレジットカード決済の導入について、初期費用と毎年の運用費がかかることから、別の決済方法を検討することが提議され、満場一致で承認された。またマイページが老朽化していることから、改修の必要があることを確認した。

第12号議案 その他

その他の審議事項は特になし。

IV. 報告事項

1. 2022年度会員動向

総務担当木下理事より2022年度の会員動向について配付資料に基づき報告があった。

2. 2022年度定時社員総会報告

総務担当木下理事より、2022年5月29日に開催された2022年度定時社員総会での出席者数および議事録について配付資料に基づき報告があった。

3. 全国大会運営委員会からの報告

研究担当伊藤理事より、各行事の準備状況等について配付資料に基づき報告があり、その後、行事ごとにそれぞれの担当理事から詳細な説明があった。

4. 機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集担当坪理事より、機関誌『社会福祉学』の論文投稿受付・審査および編集状況について、配付資料に基づき報告があった。

5. 国際学術交流促進委員会からの報告

国際学術交流促進委員会担当の金子副会長より、第70回秋季大会で実施する留学生と国際比較研究のためのワークショップの準備状況等について配付資料に基づき報告があった。また、今大会には韓国から5チーム（ポスター発表3件、口頭発表2件）が参加予定である。

10月に韓国社会福祉学会の大会および中国福祉研究専門委員会による「東アジアフォーラム」が開催される予定である。

6. 学会賞審査委員会からの報告

学会賞審査委員会担当杉山理事より、第70回秋季大会の開会式に引き続いて執り行われる学会賞授賞式、および当日に向けてのスケジュールについて、配付資料に基づき説明があった。

7. 研究倫理委員会からの報告

現在進行中の調査案件はなし。

8. 広報委員会からの報告

広報委員会担当岩永理事より、随時、学会ホームページの更新および多言語翻訳を行い、定期的に広報活動を行っているとの報告があった。

9. アーカイブ化推進委員会からの報告

アーカイブ化推進委員会担当元村理事より、委員会内の業務分掌および今後のスケジュールについて、配付資料に基づき報告があった。

10. 研究支援委員会からの報告

研究支援委員会担当高良理事より、スタートアップ・シンポジウム、CS-NET、リレーエッセイおよびサロン企画等の進捗状況等について、配付資料に基づき報告があった。

11. 地域ブロックからの報告

・北海道地域ブロック：6月4日に北海道社会福祉学会の総会・講演・シンポジウムを開催し、盛況に終わったとの報告があった。現在、60周年事業に向けて準備中である。

・東北地域ブロック：今年度の研究大会は11月23日に青森県立保健大学での開催を予定している。

現時点では対面開催の予定である。

- ・関東地域ブロック:運営委員会を開催し、今後の運営体制等について協議をしている。今年度の研究大会は2023年3月19日開催を予定しており、企画内容等の詳細については今後検討を行う予定である。
- ・中部地域ブロック:報告事項は特になし。
- ・関西地域ブロック:年次大会は例年通り年度末の開催を予定している。現在、機関誌『関西社会福祉研究』の発刊に向けて準備を進めている。8月に理事会を開催予定である。
- ・中国四国地域ブロック:7月9日に第53回大会を対面形式で開催し、盛況に終わったとの報告があった。
- ・九州地域ブロック:7月10日に長崎国際大学を開催校として研究大会をオンライン開催し、盛況に終わったとの報告があった。また、6月に定期総会を書面開催し、その表決結果について7月6日に会員へ書面報告したとの説明があった。

12. その他(後援依頼、関連団体からの報告、他)

・後援(協賛)依頼について

総務担当木下理事より、前回理事会での報告以降、後援依頼はなかったとの報告があった。

・関連団体からの報告

1) 日本社会福祉系学会連合

保正副会長より、本学会と共同して調査を実施予定であるとの報告があった。

2) ソーシャルケアサービス研究協議会

金子副会長より、6月27日に開催された全体会議の報告があった。

3) 社会政策関連学会協議会

杉山理事より7月23日に開催された会議にて役員の改選が行われたとの報告があった。

4) 社会学系コンソーシアム

木下理事より、2023年1月28日(土)にシンポジウムの開催を予定しているとの報告があった。

5) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会:GEAHSS(ギース)

報告事項は特になし。

6) 人文社会系学協会連合連絡会

報告事項は特になし。

議長は、議事終了を告げ、12時00分に理事会を解散した。

以上

新入会員紹介

2022年度第1～3回理事会承認者（50音順 敬称略）

青木 尚人	立教大学
青柳 修平	TRINITY SOLUTION
新井 洋之	葛飾区役所
荒木 菜奈	大分大学大学院
有野 雄大	筑波大学大学院
有馬 靖子	きょうだい支援を広める会
安發 明子	立命館大学
安藤 友子	日本福祉大学大学院
安樂 英美	鹿児島国際大学
李 東振	同志社大学
伊井 勇	立命館大学大学院
井川 裕寛	上智大学
幾田 こずえ	東京福祉専門学校
石山 美枝	医療法人社団ホームアレー
市原 純	北翔大学
伊藤 慶充	同志社大学
井上 務	日本福祉大学
岩永 由佳	西南学院大学大学院
岩見 由美	
内山 聡至	独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
王 翰博	東京福祉大学・大学院
押領司 賢二	社会福祉法人章佑会和光市共生型福祉施設ひかりのさと
大河原 花子	東洋大学大学院
大久保 薫	札幌学院大学
大塚 千枝	厚生労働省
大部 さつき	アルファ医療福祉専門学校
大山 真澄	日本女子大学
奥山 洋祐	川口市横曽根地域包括支援センター
小倉 靖範	愛知教育大学
郭 鋳	一橋大学
柏木 志保	日本福祉大学
勝見 駿佑	関西学院大学大学院
角 朋之	厚生労働省関東信越厚生局
金澤 潤一郎	北海道医療大学

上川 毅	佛教大学
姜 允彬	大阪公立大学
木村 将夫	阪南市立たんぽぽ園
桐原 尚之	立命館大学
金 明月	県立広島大学
久保田 怜	大阪大学
倉田 あゆ子	日本女子大学
栗山 翔吏	久留米大学大学院
小出 直	松前町立松前病院
河内 佑美	広島文教大学
神徳 和子	帝京大学福岡キャンパス
古賀 なゆか	川崎医療福祉大学
小平 梨香	長野県教育委員会
小林 桃子	西南学院大学
佐藤 和美	仙台青葉学院短期大学
篠原 史生	立命館大学大学院
肖 栄栄	龍谷大学
須江 泰子	日本社会事業大学
杉田 菜花	大阪市立大学
杉本 美奈子	日本ソーシャルワーク教育学校連盟
鈴木 ちひろ	大阪府立大学
鈴木 和	北海道医療大学
高梨 友也	東北文教大学
高野 守道	川のほとり司法書士事務所
高橋 俊文	秋田看護福祉大学
高橋 陽介	独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター
高守 裕樹	株式会社新栄ライフサービス
武本 隆行	東京福祉大学
田幸 恵美	
田中 さくら	福岡県立大学院
田中 ほのか	福岡県立大学
種村 暁也	川崎医療福祉大学
張 芝菱	同志社大学
陳 凌雲	同志社大学
鶴岡 和幸	広島文化学園大学
戸石 輝	日本赤十字社和歌山医療センター
遠矢 誠将	医療法人参天会
富田 絢子	神戸女子大学

富田 沙耶	早稲田大学
中川 智之	川崎医療福祉大学
中山 明代	社会福祉法人 聖友乳児院
中山 昌子	栃木県教育委員会事務局塩谷教育事務所
奈良 夕貴	株式会社 NTT データ経営研究所
縄岡 好晴	明星大学
西脇 啓太	早稲田大学大学院
野中 弘美	鹿児島国際大学
馬 シイク	一橋大学
萩原 真由美	San Francisco State University
馬場 保子	長崎国際大学
林 孝和	日本文理大学
日間賀 恵子	多気町社会福祉協議会
広川 義哲	龍谷大学
福玉 大輔	社会福祉法人北海道社会事業協会 母子生活支援施設すずらん
藤永 海里	福岡県立大学
逸見 万葉	四国学院大学
堀口 魁斗	株式会社サンケア
松下 浩之	山梨大学
松田 晃	静岡厚生会
真鍋 里彩	大阪府立大学
宮崎 百伽	久留米大学
宮澤 江梨子	健康科学大学
宮本 雄司	東洋大学
ムスタキム マリカ	大阪大学
村田 裕子	日本社会事業大学
望月 太敦	杉並区立重症心身障害児通所施設わかば
森 彩佳	北海道社会福祉事業団
森下 美香	神奈川県社会福祉士会
諸岡 雅美	社会福祉法人名古屋市総合リハビリテーション事業団
安永 早弥香	久留米大学大学院
矢淵 規子	船橋市役所
山田 妙韶	日本福祉大学
山本 忠直	国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局秩父学園
吉田 由美子	大分大学
羅 傑夫	同志社大学大学院
涌水 理恵	筑波大学
渡辺 直人	和歌山信愛女子短期大学

日本社会福祉学会事務局から

◆会費の納入はお早めをお願いします

平素より学会活動にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

皆様、2022年度の年会費のご納入はお済みでしょうか。皆様からお納めいただきました年会費は、学会活動を支える貴重な財源となりますので、未納の方は至急お納めくださいますようお願いいたします。

また、2020年度の年会費が未納の方は、『社会福祉学』の送付を一時停止させていただきます。会費納入を確認しましたら学会誌の発送を再開いたしますので、ご了承いただきますようお願いいたします。

これから納入される方で、銀行振込みによるご入金をお考えの方は、お名前の前に会員番号を入力してください。また、大学等のご所属先を通じてお振込みをされる場合は、学会事務局宛に①会員名、②会員番号、③振込日、④振込金額、⑤振込名義、⑥備考をメールまたはFAXでご連絡ください。

◆登録情報更新のお願い

お引越しや所属先の異動等により登録情報に変更のあった方は、学会ホームページの会員ページ「マイページ」より、以下の手続きが可能ですので、どうぞご活用ください。

①登録内容の確認・変更、②パスワードの変更、③会費納入状況の確認、④会員名簿検索

◆メールアドレス登録のお願い

本学会では会員の皆様への連絡手段としてメール配信を利用しています。メールアドレスの登録をされていない方は、メールアドレスの登録にご協力くださいますようお願いいたします。現在、メールアドレスを登録されていない方で、メールアドレスの登録にご協力いただける方は、学会事務局<office@jssw.jp>までご連絡ください。

また、会員ページ「マイページ」にログインされる際のパスワードをお忘れの場合、会員番号と登録されたメールアドレスによりWEB上でパスワード照会が可能です。ぜひ一度ご確認ください。

編集後記

秋も深まりつつあります。寒暖差のある日もありますが、皆様お身体の調子はいかがでしょう。先日、鳥取県の大山に家族で行ってきました。秋晴れの天気の良い日で、中国地方最高峰の大山を綺麗に眺めることができました。角度によれば伯耆富士と呼ばれるとおり、まさに富士山に見えます。この翌日、大山には冠雪が見られたようです。秋とともに冬が訪れる気配も感じてしまいます。

さて、学会ニュース91号をお届けいたします。

特に対面方式を中心に行われました第70回秋季大会について、津田耕一実行委員長にご報告いただいております。当日は関西福祉科学大学の教職員の皆様、学生スタッフの皆様には、丁寧かつ親切にご対応いただき、心地よく大会に参加することができました。感謝申し上げます。大会時には学術賞、奨励賞の授賞式も行われました。受賞されました会員の皆様、おめでとうございます。今号では受賞されました会員の寄稿文を掲載しております。またそのお一人でもあります岩田正美会員がこの度、新名誉会員となりました。併せて寄稿文をいただいております。

その他としては、地域ブロック情報、CS-NET「サロン企画」の始動、日本社会福祉系学会連合からの報告等を掲載しております。

これからも広報委員会では、皆様に学会ニュースをはじめSNS等により魅力ある情報を発信していきたいと思っております。引き続き、会員皆様からのご提案やご要望もお寄せいただけると幸いです。

山本浩史(新見公立大学)